

# エピクロス派の友情論

和田 利博

Toshihiro WADA

## 序

本稿における私の目的は、エピクロス本人、および彼の学派の内部には、「友情」(φιλία, amicitia)に関する単一で統合的な見解が存在していたのか否かという問題を、それに係わるいくつかのテキストと、これまでに提出されてきたさまざまな解釈を手掛かりに検討し、その作業を通じて、エピクロスによる友情論の本来的な姿を浮かび上がらせることにある。

エピクロス自身の現存する中で最長の倫理的著作『メノイケウス宛書簡』(以下, *Ep. Men.*)には、友情に関するいかなる明確な言及も見出されないが、その重要性は、彼の『主要教説』(以下, *KD*)やその他の箇所、最大級の賛辞をもって繰り返し強調されている。

全生涯の幸福のために知恵が整えるもののうち、とりわけ最大のもの (πολύ μέγιστον) は、友情の獲得である<sup>1</sup>。

……友情による安全こそが、もっとも完全なもの (μάλιστα ... συντελουμένη) である……<sup>2</sup>。

だが、これらの主張においてただちに気づかされるのは、そこに利他主義的な

<sup>1</sup> Epicur. *KD* 27. Cf. also キケロ『善と悪の究極について』(以下, *De Fin.*) I. 65.

<sup>2</sup> Epicur. *KD* 28. Cf. also Cic. *De Fin.* I. 68.

要素がまったく欠落しているということである。すなわち、エピクロスにとって友情とはあくまでも、それがもたらす援助や安全、およびそれらのことについての確信により<sup>3</sup>、幸福へ至るための手段であり、したがって、その功利性こそが根本的なのである。

ところがその一方で、賢者に関するエピクロス派の見解の一覧<sup>4</sup>の中では、賢者は「いかなる友人をも見捨てることはないだろう」<sup>5</sup>と、また「ときには、友人のために命を捨てることもあるだろう」<sup>6</sup>といった報告がなされており、これらは確かに、エピクロス自身の「……友情のためには、危険を冒しさえすべきである」<sup>7</sup>という言葉や、プルタルコスによる「……また彼〔エピクロス〕は、快樂のために友情を選んでおきながら、友人のためには最大の苦痛をも甘受する、と言っている」<sup>8</sup>などの証言とも合致している。

以上の事実より Rist は、1972 年に出版された彼の著書において、「友情の功利主義的な側面と利他主義的なそれとを調和させるという問題は、エピクロス派それ自体の内部に分裂をもたらした」<sup>9</sup>と、そして「そのジレンマはキケロにより、『善と悪の究極について』の中で最も適切に詳述されている」<sup>10</sup>と記している。そこでわれわれは、ひとまず Rist の整理にしたがいながら、問題となるテキストを順番に見て行くことにしよう。

## 1

トルクワトゥス〔エピクロス派の信奉者〕：「さて、友情について私たちの〔エピクロス〕派内では三つの論じ方で (*tribus ... modis*) 論じられてきたように思います。

<sup>3</sup> Cf. エピクロス『ヴァチカン箴言集』（以下、SV）34, 39; ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』（以下、D.L.）X. 120b.

<sup>4</sup> Cf. D.L. X. 117-21. ただし Long は、ここで述べられていることのうちのいくつかはエピクロスより後代のものと推定されうるとしている、cf. Long and Sedley, vol. 2, p. 142.

<sup>5</sup> D.L. X. 120a.

<sup>6</sup> D.L. X. 121b.

<sup>7</sup> Epicur. SV 28.

<sup>8</sup> プルタルコス『コロテス論駁』（以下、Adv. Col.）1111B.

<sup>9</sup> Rist (1972), p. 127.

<sup>10</sup> *Op. cit.*, p. 129.

(0) まず、私たちは友人に関わる快楽を、それ自体のために、私たち自身の快楽を追求するのと同じ程度まで、追求すべきではない (*eas voluptates quae ad amicos pertinerent negarent esse per se ipsas tam expetendas quam nostras expeteremus*), と主張する人びとがいます。この説を、友情の根本を揺るがすものと見る人びともいますが、本人たちは依然としてその立場を守り続けており、しかもその窮地からやすやすと脱け出しているように、少なくとも私には思えます<sup>11</sup>。

奇妙なことに、この(0)について Rist は、「トルクワトゥスはこの見解をエピクロス自身には帰しておらず、また文脈はそれが師の立場でなかったことを確実にしている」<sup>12</sup>と述べている。だが、Rist の解釈に基づけば、追って明らかとなるように、トルクワトゥスは冒頭で「三つの論じ方」を予示していたにもかかわらず、最終的には都合四つの論じ方が登場することになってしまう。また Mitsis も指摘するとおり<sup>13</sup>、トルクワトゥスがこの(0)を、次の(1)と連続した単一の立場の部分として提示していることは、まさに文脈からして確実だろう。Rist をこのような主張へ導いた原因は、彼が(0)において「友情の根本を揺るがす」と見なされているものを、「友人の快楽を過大評価する (*overvalue*)」<sup>14</sup> ことと解した点にあると思われるが、テキストを率直に読むかぎり、それは逆に、友人の快楽を過小評価する (*undervalue*) ことと解するべきだろう。後者の場合、これは確かに、エピクロスに一般的な利己主義的傾向と調和している。したがって、問題はむしろ、続く(1)をどう理解するかにかかってくる。

トルクワトゥス：「(1) 彼らは、先に触れました諸々の徳と同様、友情もまた快楽から切り離すことができない、と考えています。……

そして、私たちは友情を欠いていてはどのようにしようとも人生の堅固でまた永続的な喜びを保持することができないのですから、……

そのようなわけで、賢者は友人に対しても、自分自身に対するのと同様に傾向づけられる<sup>15</sup>でしょうし、また、自分の快楽のために引き受けるのと

<sup>11</sup> Cic. *De Fin.* I. 66 (符号は筆者)。

<sup>12</sup> Rist (1972), p. 129.

<sup>13</sup> Cf. Mitsis, pp. 139-40 n. 26; also O'Connor, p. 183, n. 40; Brown, p. 70, n. 3.

<sup>14</sup> Rist (1972), pp. 129-30 (強調は筆者)。

<sup>15</sup> この '*erit affectus*' という表現は通常、「感情を抱く」と訳されているが(岩

同じ労苦を友人の快樂のために引き受けることでしょう (eodem modo sapiens erit affectus erga amicum quo in se ipsum, quosque labores propter suam voluptatem susciperet, eosque suscipiet propter amici voluptatem)」<sup>16</sup>。

Ristによれば、この(1)こそが「正統的なエピクロス派の見解」<sup>17</sup>であり、そのこと自体は、*De Fin.* 第II巻でキケロが自らエピクロス主義の批判者として、トルクワトゥスの説明を敷衍している際の発言からも確実だろう<sup>18</sup>。

キケロ：「……君〔トルクワトゥス〕がいくつか友情についてお話しになったことを順番に見てみることにしましょう。

その中には私にもエピクロス自身の発言と取ってよいように思われるものが一つだけありました (e quibus unum mihi videbar ab ipso Epicuro dictum cognoscere)。 (1') 友情は快樂から切り離すことができず、また友情は大事にしなければならぬが、それは、それなしでは安全に、恐れを感じずに生きることができないがゆえに、快適に生きることができないという理由によってである、というのがそれです」<sup>19</sup>。

しかしながら、先ほど確認したように、もし(1)が(0)と連続した単一な立場だとするならば、一見、対立するかに映るこれら両者の主張は、いかにして調停させられうるのだろうか。たとえば Mitsis は、(0)から(1)への移行が「いくぶん並列的に (paratactically)」なされていると認めた上で、まさにこの点に「エピクロス自身の著作において表面化する、未解決な哲学的緊張」を見て取ろうとしている<sup>20</sup>。その一方で O'Connor は、Rist に反して(0)をエピクロス自身の立場と認める点では Mitsis に同意しながらも、そこから(1)への議論の展開に致命的な欠陥を見出し、むしろ(1)こそが、師の見解を反映していない、トルクワ

波選集訳。Rackham, Woolf 訳は 'feeling', Long (1987), Inwood and Gerson 訳は 'having a (specified) feeling', こうした affective な読み方に代えて O'Keefe は, Lewis and Short, s.v. *afficio* を参照しつつ, 「傾向づけられる」 (being disposed) という behavioral な読み方を提案している, cf. pp. 296-7, n. 56; also 本稿の n. 49.

<sup>16</sup> Cic. *De Fin.* I. 66-8 (符号は筆者)。

<sup>17</sup> Rist (1972), p. 130. Cf. also Long and Sedley, vol. 2, p. 140.

<sup>18</sup> Cf. Brown, p. 70 n. 3; O'Keefe, p. 289, n. 44.

<sup>19</sup> Cic. *De Fin.* II. 82 (符号は筆者)。

<sup>20</sup> Cf. Mitsis, pp. 139-40.

トゥス自身を含む「私たち」、すなわち、後代のエピクロス派の人びとに由来するものなのだ、と結論づけている<sup>21</sup>。

だが、この問題については、Brownの提起した解法が参考になるだろう。彼によれば、(0)の「友人の快樂は、それ自体のためには、われわれ自身のものと同じ程度まで追求されるべきでない」という主張は、「友人の快樂は、われわれ自身のものよりも少なく追求されるべきである」ということを意味しない。ここでは、「それ自体のために」(per se)という表現に注意されるべきである。すなわち、(0)が係わっているのは「欲求の量(quantity)」でなく、「欲求される快樂の究極性(finality)」なのである。他方、(1)の「賢者は、友人の快樂と自分自身のものにより、同様に傾向づけられるだろう」という主張は、「賢者は、それ自体のために、自分自身の快樂によって傾向づけられるのと同様に、それ自体のために、友人の快樂によって傾向づけられるだろう」ということを意味しない。ここでは、「同様に」(eodem modo)という表現がより緩やかに解されるべきである。すなわち、(1)が係わっているのは「欲求される快樂の究極性」でなく、「欲求の原動力(motive force)」なのである。したがって、たとえ「賢者は、自分自身の快樂によって傾向づけられるのと同様に、友人の快樂によって傾向づけられる」のだとしても、いずれの場合も彼は、「究極的には、自分自身の快樂のために」傾向づけられているのである<sup>22</sup>。

以上の点が確認できところで、われわれは再び、*De Fin.* 第I巻におけるトルクワトゥスの解説へ戻ることしよう。

## 2

トルクワトゥス：「(2)また第二に、みなさん〔アカデメイア派の人びと〕の声高な悪罵を前にやや弱気にはなっていますが、しかし鋭い思考をするエピクロス派の人びと(Epicurei timidiores)もいます。彼らは、……最初の

<sup>21</sup> Cf. O'Connor, pp. 183-5; also Vander Waerdt, p. 416 n. 56.

<sup>22</sup> Cf. Brown, pp. 70-1. またトルクワトゥスは、続く(2)の立場の説明の中で、(1)の立場における何がエピクロス派の人びとにその代替案を提起させたのかを記述する際、「彼らは、もし私たちが私たち自身の快樂のために(propter nostram voluptatem)友情を追求すべきものと考えようになれば、友情そのものがまるで片足を失ったかのような印象を与えるようになるのではないかと恐れています」(*De Fin.* I. 69)と述べている。これは、(1)の立場にしたがえば、友情が尊重されるのはあくまでも道具的な根拠に基づいてである、ということを示唆している、cf. O'Keefe, p. 292.

出合いや交際、また親交を確立しようとする意欲は、**快樂のために** (propter voluptatem) 行なわれ、生じる、しかし、交際が進み親しみが感じられるようになると、愛が花を開き、たとえ友情からいかなる利益も得られなくとも、友人は友人自身が友人自身のために愛されるようになる (etiamsi nulla sit utilitas ex amicitia, tamen ipsi amici propter se ipsos amentur), と主張します<sup>23</sup>。

Ristによれば、この(2)は「明らかにエピクロス自身よりも後の世代の学派のあるメンバーたち」による「非正統的な立場」であり<sup>24</sup>、そのこと自体もまた、*De Fin.* 第II巻におけるキケロの発言から確実なように思われる。

キケロ：「(2)君は、さらに、もっと人間らしい (humanius)、最近の〔エピクロス派の〕人びと (recentiores) が唱えていて、私の知るかぎりでは、彼〔エピクロス〕自身はまったく口にしていない (numquam dictum ab ipso illo) 考え方も付け加えられました。友人は、最初利益のために (utilitatis causa) 求められるが、なじみが重なると、快樂の希望を度外視しても、友人自身が友人自身のために愛されるようになる (ipsum amari per se, etiam ommissa spe voluptatis), というのがそれです」<sup>25</sup>。

ところが Mitsis は、これを「懐疑派アカデメイアからの批判の結果として展開された、利他主義的含意を持つ派生形」<sup>26</sup>だとする Rist の歴史的説明に異議を唱えている。Mitsisによれば、この見解（彼は「観念連合説」(associationism) と呼んでいる）の支持者たちが「やや弱気」(timidiores) になっている理由とは、彼らが、エピクロスによって公式化された厳格な利己主義にもかかわらず利他主義を主張しているからではなく、エピクロス自身の説のうちにはじめから胚胎していた利他主義を、自己利益から切り離されさえしようと主張しているからなのである<sup>27</sup>。

Mitsis がエピクロスの説のうちに利他主義的な要素を認める決定的な根拠と

<sup>23</sup> Cic. *De Fin.* I. 69 (符号は筆者)。

<sup>24</sup> Rist (1972), pp. 130-1. Cf. also Long and Sedley, vol. 1. p. 138; vol. 2, p. 140.

<sup>25</sup> Cic. *De Fin.* II. 82 (符号は筆者)。

<sup>26</sup> Rist (1972), p. 131.

<sup>27</sup> Cf. Mitsis, p. 139 n. 25.

なっているのは、彼自身によるものとされる、次のテキストである<sup>28</sup>。

友情はすべて、それ自体のために望ましい。利益から出発するものではあるが (πάσα φιλία δι' ἑαυτὴν αἰρετή· ἀρχὴν δ' εἴληφεν ἀπὸ τῆς ὠφελείας)<sup>29</sup>。

Mitsisによれば、「友情は di' heautên hairêtê [それ自体のために望ましい] と主張する際、エピクロスは快楽以外の価値や目的を認めている」<sup>30</sup>のであり、「これは、彼による快楽主義の主張と両立しない」<sup>31</sup>。

確かに、一見したところ SV 23 の主張は、いわゆる正統的なエピクロス派の見解から利他主義的な方向への逸脱を示しているように映る<sup>32</sup>。この問題について Rist が提出してみせる解法とは、以下のとおりである。「エピクロスが、友情はそれ自体のために望ましい、と言うとき、おそらく彼は単に、それは究極的に価値がある、ということの意味しているわけではない。なぜなら、究極的

<sup>28</sup> Cf. *op. cit.*, pp. 129-30. さらに Mitsis は、「エピクロスの diadochoi [後継者たち] によって展開された二つの説 [i.e. 本節の (2) と次節の (3)] ……はそれぞれ、利他主義に関するエピクロスの思想の重要な要素を分離し、さらに推敲している」(p. 133. [ ] 内は筆者) のであり、「両者は、エピクロスの説のうちにより曖昧な仕方では感じられる衝動のありうべき展開である」(p. 139) と述べている。

<sup>29</sup> Epicur. SV 23. このテキストにおける αἰρετή (望ましい) という語は Usener による改訂であり、写本では ἀρετή (徳) となっている。Rist (1972) が友情を「徳」として語ることに違和感を覚えているのに対し (cf. p. 131 n. 1), Long はアリストテレスが友情に「徳の一種」(ἀρετή τις) という称号を認めている (cf. 『ニコマコス倫理学』1155a4) 事実を指摘した上で (cf. (1985), p. 305), いずれにせよ「快楽以外のものに per se [自体的な] 価値を付与するという問題に変わりはない」(Long and Sedley, vol. 2, p. 132. [ ] 内は筆者) との消極的な理由から、写本の読みを残している。しかしながら、そもそも「自体的な徳」ということで何が意味されているのかが理解困難であるし (e.g. Mitsis, p. 129 n. 7; O'Keefe, p. 279 n. 29), 何より、この読みをとった場合、問題はより深刻なものとなるだろう。なぜなら、エピクロスによれば「われわれが徳を選び取る (αἰρεῖσθαι) のも、快楽のためにであって、[徳] それ自体のためにではない (οὐ δι' αὐτάς)」(D.L. X. 138) からである。

<sup>30</sup> Mitsis, p. 132 ( [ ] 内は筆者) .

<sup>31</sup> *Op. cit.*, p. 153.

<sup>32</sup> そこから Rist (1972) も、「非正統的なエピクロス派の人びとは、彼らのより利他主義的な解釈を正当化するために、師からこの一節を利用したのだということもありえない話ではないように思われる」(p. 132) といった推測を行なっている。

に価値があるのは快楽だけだからである。そうではなくて、彼が意味しているのは、それは直接的、かつ媒介なしに快楽の獲得へ導く、ということなのである。もし彼が、それは δι' ἕτερα [他のもののために] 価値がある、と言っていたならば、彼が意味しているのは、それはその次に快楽を生み出すような他のものを生み出すがゆえに価値がある、ということになってしまっただろう<sup>33</sup>。この提案が興味深いものであることは認めながらも、Mitsis は、当該の文脈でいかにして δι' ἑαυτήν (それ自体のため) に道具的な意味が帰されうるのかを疑問視している<sup>34</sup>。なぜなら、それは明らかに ἀπὸ τῆς ὠφελείας (利益から) と対比されているからである<sup>35</sup>。

しかしながら Rist は、1980 年に発表された彼の論文の中で、また別の解法を提起している。すなわち、*De Fin.* 第 I 巻で、あるエピクロス派の人びとによれば「(2) 最初の出会いや交際、また親交を確立しようとする意欲は、快楽 (voluptas) のために行なわれ、生じる、しかし、交際が進み親しみが感じられるようになると、愛が花を開き、たとえ友情からいかなる利益 (utilitas) も得られなくとも、友人は友人自身が友人自身のために愛されるようになる」<sup>36</sup>と述べているとき、トルクワトゥスは正当である。これらのエピクロス派の人びとの言っているのが、その友情からいかなる「快楽」も得られなくとも、ではなく、いかなる「利益」も、である点に注意しなければならない。つまり彼らは、必要が友人によって満たされることの快楽と、そうした具体的な利益とはまったく別個な、友人を持つことや友情それ自体の好ましさととの間に区別を設けているのであり<sup>37</sup>、だがいずれにせよ、友情は快楽をもたらすのである。したがって、

<sup>33</sup> *Ibid.* ( [ ] 内は筆者)。Rist はまた、エピクロスが友情は直接的に快楽へ導くと考えた理由の一つは、それが慈善の機会を与えるからだとして、プルタルコスの報告による次のエピクロス派 (あるいは、エピクロス自身) の主張に注意を促している (cf. pp. 132-3)。「他人によくすることは、他人からよくされることよりも (美しいだけでなく、また) 快い」(プルタルコス『エピクロスに従っては、快く生きるのは不可能であること』1097A; 『哲学者はとくに君主と話し合うべきことについて』778C。Cf. also Epicur. SV 44)。それに対して Mitsis は、この一節を友情に関する議論の中で用いるのはミスリーディングだと反論しているが (cf. p. 140 n. 26)、彼の説明には賛同できない。

<sup>34</sup> なお、Mitsis 自身も αἰρετή への改訂を採用している (cf. p. 129 n. 7)。

<sup>35</sup> Cf. *ibid.* また、δι' ἑαυτήν αἰρετή という表現の Rist による解釈への批判は、cf. Brown, p. 73, n. 14。

<sup>36</sup> Cic. *De Fin.* I. 69.

<sup>37</sup> この主張に対する反論は、cf. Mitsis, p. 135 n. 17。

彼らはエピクロス自身による SV 23 の精神に則って思考していることになる。他方、同書第 II 巻で、「最近のエピクロス派の人びと」によれば「(2) 友人は、最初利益 (utilitas) のために求められるが、なじみが重なると、快楽 (voluptas) の希望を度外視しても、友人自身が友人自身のために愛されるようになる」と報告しているとき、キケロはこれらのエピクロス派の人びとの説を誤解しているか、もしくは特にエピクロス自身を除外することにより、師を「もっと人間らしい」考え方を唱える彼の弟子たちと対抗させようという意図の下に誤伝している。したがって、キケロ自身による主張の方は無視されて然るべきである。かくして、真のエピクロス主義は、エピクロス自身と彼の弟子たちとの両者によって提示されており、それは、友情の具体的な報酬を非具体的なものから区別するというようなものなのである<sup>38</sup>。

また Long は、(2) の戦略における利他主義がエピクロス自身にまで遡られることはありそうにないとするものの、SV 23 は友情に、道具的価値と同時に内在的価値をも帰していると認めた上で、「友情は、幸福にとって非常に不可欠なものであり……、それゆえ精神の本質的に快い状態であって、単にその目的への手段というわけではないだろう」と、そして、この解釈に基づけば SV 23 は、(2) のごとく「『友人をまさに彼自身のために愛する』というほど強力に利他主義的なことは含意していない」と結論づけている<sup>39</sup>。さらに彼は、Mitsis への反論の中で、何かが道具的とともに内在的にも善きものであることは可能だとして、次のように述べている。「もし友情が快楽でありうるとすれば、すなわち、もし所与の活動や精神状態の喜びが、友人や友人の善に利益を与えたり、それらについて考えたりすることに存しうるとすれば、快楽主義にとっての問題は何も生じないように思われる。友人に利益を与えることが、音楽を聴いたり、テニスをプレイしたりすることと同じくらい明らかに快いものであってなぜいけないのか？」<sup>40</sup>。

Mitsis に対しては、O'Connor や O'Keefe からも、以下のような反論が寄せられている。すなわち、SV 23 が述べているのは、友情は内在的に価値がある、ということであって、友人は内在的に価値がある、ということではない。ひとは、友人との関係から得られる何かさらなる善きもののためにでなく、また「友人

<sup>38</sup> Cf. Rist (1980), pp. 123-4. 彼は自著 (1972) に言及して、「私は *Epicurus*, pp. 130-1 で、このことを見逃していた」((1980), p. 123 n. 29) と告白している。

<sup>39</sup> Cf. Long and Sedley, vol. 1, p. 138; also Long (1985), p. 305.

<sup>40</sup> Long (1985), p. 306 n. 22. これに対する再反論は、cf. Mitsis, p. 143 n. 33.

に対する無私な関心」<sup>41</sup>を抱くこともなしに、その関係をそれ自体のために尊重することができるのだ、と<sup>42</sup>。

その上で O'Connor は、SV 23 の前半部と後半部を対比的にでなく、後者が前者を説明するものとして、「友情はすべて、それ自体としては善きものなのであり、なぜなら、それは利益に基づいているからである」といった具合に釈義している。O'Connor によれば、エピクロスがここで念頭に置いているのは、友情がそれ自体として望ましいという一般的な場合と、それにもかかわらず避けられねばならないという例外的な場合との間の対比なのである<sup>43</sup>。この読みに対し Brown は、SV 23 の前半部と後半部を繋ぐ接続詞  $\delta\epsilon$  の明らかに逆接的な意味を無視している、と反論しているが<sup>44</sup>、この指摘は必ずしも決定的なものでないだろう。Denniston によれば、接続詞  $\delta\epsilon$  には「連続的」(continuative) や「逆接的」(adversative) 以外にも、 $\gamma\acute{\alpha}\rho$  (なぜならば) に代わる用法が確かに存在しているからである<sup>45</sup>。

最後に、O'Keefe と Brown はそれぞれに、さまざまなありうべき選択肢のうちの一つとして、SV 23 の著者はそもそもエピクロス本人でなかったという可能性を考慮している。なるほど、このような解法は通常、「その場しのぎ」(O'Keefe) のように思われ、はじめは「いささか絶望の気味がある」(Brown) かかもしれないが、この場合に関しては、それを信ずるに足る十分な理由が存在するのである。第一に、SV 23 が伝えられているのは『ヴァチカン箴言集』においてのみであるが、これはすべてがエピクロスに帰されるものでなく、そのうちのいくつかは彼の弟子たちに由来している<sup>46</sup>。第二に、SV 23 は、キケロによる証言の中でアカデメイア派からの批判を前に「やや弱気になっている」とされていた後代のエピクロス派の人びとの立場から見れば、容易に説明可能である。したがって、もし  $\alpha\iota\pi\epsilon\tau\eta$  への改訂が採用されねばならないとすれば、キケロ

<sup>41</sup> Mitsis, p. 131.

<sup>42</sup> Cf. O'Connor, p. 185; O'Keefe, p. 279.

<sup>43</sup> Cf. O'Connor., pp. 185-6 (強調は原文)。彼はそこで、*Ep. Men.* 129 および *KD* 8 でのエピクロスによる快樂全般についての類比的な議論に注意を促している。

<sup>44</sup> Cf. Brown, p. 73 n. 13.

<sup>45</sup> Cf. Denniston, pp. 169-70. さらに p. 169 n. 1 では、「 $\delta\epsilon$  はときとして、 $\gamma\acute{\alpha}\rho$  に改悪されることがある。その逆もまた、しばしば生じる」とされている。なお、『ヴァチカン箴言集』には、テキスト校訂の際に比較対照されるべき他の写本が伝存していないという点も注意されてよいだろう。

<sup>46</sup> Cf. Bailey, p. 375.

の証言に基づいて、SV 23 はエピクロス自身でなく、後代のエピクロス派の人びとへ帰されて然るべきなのである<sup>47</sup>。

さて、SV 23 を根拠にエピクロス本人へ利他主義的な見解を帰そうとする Mitsis の試みに対抗しうるいくつかの解釈を見てきたが、それらのうちのいずれが絶対に正しいものであるかという点に関しては、まだ確実なことは言えないというのが正直なところだろう。だが少なくとも、それらの方が、エピクロス自身の説のうちに利他主義的な要素を認めてしまうような解釈よりは、はるかに説得的であるということだけは言えるように思われる。以上の点が確認できたところで、われわれはいま一度、*De Fin.* 第 I 巻におけるトルクワトゥスの解説へ戻ることにしてしよう。

### 3

トルクワトゥス：「(3) また第三に、賢者のあいだには、友人よりも自分自身をより大事にすることがないようにする (*ut ne minus amicos quam se ipsos diligant*) という、一種の協約 (*foedus*) のようなものがある、と言う人びともいます。……また、そのような結びつき以上に、喜びに満ちた生に寄与するものは、何も見出すことができないことは明らかです。

以上のすべてから、快樂を最高の善としても、友情の原理は何ら妨げを受けないのみならず、それがなければ友情が成立する可能性すら見出すことができない、ということが判断されます」<sup>48</sup>。

併せて、*De Fin.* 第 II 巻におけるキケロの発言も挙げておこう。

キケロ：「(3) また、賢者はたがいのあいだに一種の協約 (*foedus*) のようなものを結んでおり、友人に対しても自分自身に対するのと同様に傾向づけられる<sup>49</sup>ようにしている (*ut, quemadmodum sint in se ipsos animati, eodem*

<sup>47</sup> Cf. O'Keefe, pp. 287-8; Brown, pp. 78-9.

<sup>48</sup> Cic. *De Fin.* I. 70 (符号は筆者)。

<sup>49</sup> この '*sint animati*' という表現もまた、*De Fin.* I. 68 の '*erit affectus*' と同様 (cf. 本稿の n. 15), 通常の訳のごとく「感情を抱く」(岩波選集訳。Rackham 訳も '*feeling*') といった affective な意味でなく、「傾向づけられる」という behavioral な意味に解することが可能だろう (Woolf 訳は '*adapting a (specified) attitude*'). 事実、『友情について』56-7 においてキケロは、*De Fin.* I. 68 とほぼ同じ言葉遣いの「われわれは友人に対しても、

modo sint erga amicos), と主張している人びともいる, その協約が……快樂の獲得に果たす役割はきわめて大きい, とも君はおっしゃいました」<sup>50</sup>。

Ristはこの(3)について, 友情を正義と似たものにしており, 両者はともに契約であるが, 一方(正義)は害さないという, 他方(友情)は助けるというそれなのだ, と述べ, 彼が先に「正統なエピクロス派の立場」と呼んでいたものと両立しようと考えている<sup>51</sup>。そして彼は, その根拠を, ルクレティウスによる『事物の本性について』からの一節に求めているようである<sup>52</sup>。

その時から隣りあう人びとは友情(amicities)を結ぶことをはじめ  
互いに傷つけたり痛められたりすることをやめる(inter se nec laedere nec violari)よう望んだ<sup>53</sup>,

ところが Mitsis は, この文脈において ‘amicities’ は友情を意味しえず, ルクレティウスは単に, その基礎が相互に害しあうことを避けるための契約である, 正義の創設を記述しているにすぎないのだ, と主張している。なぜなら, 「これらの原始的な foedera (V. 1025) が相互不干渉を保障するものでしかない以上, それらは賢者によって実践される友情の成熟した見方を反映していない」からである<sup>54</sup>。この想定を巡っては, Long による反論と<sup>55</sup>, Mitsis からの再反論もな自分自身に対するのと同様に傾向づけられなければならない」(ut eodem modo erga amicum affecti simus quo erga nosmet ipsos) という見解を挙げた直後に(岩波文庫訳は「心ばえで臨む」, Falconer 訳は ‘having a (specified) feeling’), やはり *De Fin.* II. 83 とほぼ同じ言葉遣いで「人は自分に対するのと同様に, 友人に対しても傾向づけられるべきだ」(ut, quem ad modum in se quisque, sic in amicum sit animatus) と換言した上(岩波文庫訳は「気持ちを持つ」, Falconer 訳は ‘feeling’), それの不十分さを批判している。Cf. O’Keefe, p. 297 n. 56; also Glare, s.v. *animatus*<sup>1</sup> 2, *affectus*<sup>2</sup> 3.

<sup>50</sup> Cic. *De Fin.* II. 83 (符号は筆者)。

<sup>51</sup> Cf. Rist (1972), p. 131.

<sup>52</sup> Cf. Rist (1980), p. 123, n. 27.

<sup>53</sup> Lucr. *DRN* V. 1019-20.

<sup>54</sup> Cf. Mitsis, p. 134, n. 14, 137 n. 22; also Epicur. *KD* 31-3.

<sup>55</sup> Cf. Long (1985), p. 310: 「……友情は正義に先行すると考えられている」; also Long and Sedley, vol. 2, p. 134; vol. 1, p. 137: 「……友情は本来, 正義を含むとともに, それを超越する関係と考えられていた」。

されているが<sup>56</sup>、当の Long 自身、(3) の説を十分に理解するにはあまりに要約されすぎていると認めた上で、これを (2) の説と並ぶ、アカデメイア派からの反論に対する第二の修正的な応答と見なされるべきだと結論づけており<sup>57</sup>、われわれとしても、この点について特に異議を唱える謂れはないように思われる<sup>58</sup>。

## 結

以上をもって、エピクロス派内部での友情に関する見解の分裂は師に由来するものでなく、エピクロス本人の立場はそれ自体として単一で整合的であり、またそのうちに利他主義的な要素を認める必要のないことが確認できたと思われる。ここで最後に、本稿の冒頭で触れた、エピクロスによる「友情のためには、危険を冒しさえすべきである」<sup>59</sup>や、「友人のためには最大の苦痛をも甘受する」<sup>60</sup>、またとりわけ「〔賢者は〕ときには、友人のために命を捨てることもあるだろう」<sup>61</sup>などの発言は、彼の利己主義的な立場からどのように説明されるのかという問題について、ごく簡単に考察しておこう。

第一に、エピクロスはある箇所で、「苦痛にしても、それを長い時間耐え忍ぶなら、その結果として、より大きな快樂がわれわれに生ずるような場合には、多くの苦痛の方が快樂よりもまさっているとわれわれはみなす」と記している<sup>62</sup>。ところで、これも本稿の冒頭で紹介したように、「全生涯の幸福のために知恵が整えるもののうち、とりわけ最大のものは、友情の獲得である」<sup>63</sup>。したがって、もし賢者が友人のために、きわめて大きな苦痛を耐え忍ぶことがあるとし

<sup>56</sup> Cf. Mitsis, p. 134 n. 15.

<sup>57</sup> Cf. Long and Sedley, vol. 2, pp. 140-1.

<sup>58</sup> ただし Mitsis は、(3) における契約が賢者に要求しているのは、単なる積極的な相互援助にとどまらぬ、それよりも強力な、自分自身と同じくらい他者を愛するというものなのだと述べ、そのような契約は、賢者を彼のテロスに関する不整合な信念群にコミットさせることになる、と主張している (cf. p. 138, n. 23)。しかしながら、(3) の契約説の内容が (1) とほぼ同じ言葉遣いで記述されている事実は (cf. 本稿の n. 49) 、(3) にもまた、(1) と同様の利己主義的な基礎が付与されうることが示唆している。

<sup>59</sup> Epicur. SV 28.

<sup>60</sup> Plut. Adv. Col. 1111B.

<sup>61</sup> D.L. X. 121b.

<sup>62</sup> Epicur. Ep. Men. 129.

<sup>63</sup> Epicur. KD 27. Cf. also KD 28.

ても、それは、その結果として生ずるであろう、より大きな快樂を期待してのことなのだと推測できる。

第二に、エピクロスによれば、「死はわれわれにとって何ものでもない」<sup>64</sup>。その一方で、別の箇所において彼は、次のように述べている。「……〔友人を裏切ると〕彼〔賢者〕の全生涯は、不信によって乱され、くつがえされてしまうであろう」<sup>65</sup>。したがって、大半の人びとには非常な自己犠牲と映るかもしれないようなある種の行為も、賢者にとってはさほど重要なものでなく、ときとして、友人のために死ぬことは、もし彼からの不信を受けることになれば経験されるであろう耐えがたい苦痛を回避するための、適切な利己主義的戦略となりうるのである<sup>66</sup>。

(龍谷大学・非常勤講師)

### 参考文献

- Annas, J. (ed.), Woolf, R. (tr.) (2001) *Cicero: On Moral Ends* (Cambridge).
- Bailey, C. (1926) *Epicurus: The Extant Remains* (Oxford).
- Brown, E. (2002) 'Epicurus on the Value of Friendship (*Sententia Vaticana* 23)', *Classical Philology* 97: 68-80.
- Denniston, J. D. (1950) *The Greek Particles*, 2nd ed. revised by K. J. Dover (Oxford).
- Falconer, W. A. (1923) *Cicero: De Senectute, De Amicitia, De Divinatione* (Cambridge, Mass.).
- Glare, P. G. W. (1982) *Oxford Latin Dictionary* (Oxford).
- Inwood, B. and Gerson, L. P. (1994) *The Epicurus Reader: Selected Writings and Testimonia* (Indianapolis).
- Lewis, Ch. T. and Short, Ch. (1879) *A Latin Dictionary: Founded on Andrews' Edition of Freund's Latin Dictionary* (Oxford).
- Long, A. A. (1985) 'Pleasure and Social Utility — The Virtues of Being Epicurean', in H. Flashar and O. Gigon (edd.) *Aspects de la philosophie hellénistique*, Fondation Hardt, *Entretiens sur l'antiquité classique* XXXII (Vandœuvres - Geneva): 283-324.

<sup>64</sup> Epicur. *KD* 2. Cf. 拙論 (2002).

<sup>65</sup> Epicur. *SV* 56-7. テクストの読みは Inwood and Gerson, p. 39 に準拠。

<sup>66</sup> Cf. O'Keefe, p. 303 (*pace* Mitsis, pp. 128-9, n. 5). なお、エピクロス派の賢者による自殺の可能性については、cf. 拙論 (2003) の第 III 節。

- Long, A. A. and Sedley, D. N. (1987) *The Hellenistic Philosophers*, 2 vols. (Cambridge).
- Mitsis, Ph. (1988) 'Epicurus on Friendship and Altruism', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 5: 127-53.
- O'Connor, D. K. (1989) 'The Invulnerable Pleasure of Epicurean Friendship', *Greek, Roman and Byzantine Studies* 30: 165-86.
- O'Keefe, T. (2001) 'Is Epicurean Friendship Altruistic?', *Apeiron* 34: 269-305.
- Rackham, H. (1931) *Cicero: De Finibus Bonorum et Malorum* (Cambridge, Mass.).
- Rist, J. M. (1972) *Epicurus: An Introduction* (Cambridge).
- . (1980) 'Epicurus on Friendship', *Classical Philisophy* 75: 121-9.
- Vander Waerdt, P. A. (1987) 'The Justice of the Epicurean Wise Man', *Classical Quarterly* 37: 402-22.
- 和田利博. (2002) 「エピクロスにおける死への恐れの問題」, 『アルケー（関西哲学学会年報）』 10: 111-21.
- (2003) 「エピクロスにおける不死への憧れの問題」, 『古代哲学研究室紀要』 12: 1-17.

古典作品からの引用は、それぞれ以下の邦訳に準拠し、論旨の都合に応じて若干の変更を加えた（一部、筆者自身による訳も含まれているが、いちいち断わることはしなかった）。

- 『エピクロス——教説と手紙』（出隆・岩崎允胤訳、岩波文庫、1959年）。
- 『キケロー選集 10』（永田康昭・兼利琢也・岩崎勉訳、岩波書店、2000年）。
- キケロー『友情について』（中務哲郎訳、岩波文庫、2004年）。
- ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（下）』（加来彰俊訳、岩波文庫、1994年）。
- プルタルコス『モラリア 14』（戸塚七郎訳、京都大学学術出版会、1997年）。
- ルクレティウス「事物の本性について」（岩田義一・藤沢令夫訳、『世界古典文学全集 21』所収、筑摩書房、1965年）。